

巻頭言

「聞いて話す、話して聞く」

理事長 新谷友良

小学生のように、朝10分間ぐらい音読をします。教科書は司馬遼太郎の「街道を行く」、1回分が12～3ページです。音読していて、スムーズに声を出して読むことができる日は、聞こえの調子も良いということをししばしば実感します。

「話す」ことをテーマに巻頭言を書こうと思って、「聞く話すの脳科学」（コロナ社）という本をアマゾンに注文したのですが、1カ月たってもまだ入手できません。アマゾンでは、ほとんどの本が2、3日で入手できるのにこの種の本は時間が掛かるようです。

「聞く話すの脳科学」の編者であるNTTコミュニケーション科学基礎研究所の廣谷定男さんは、別のところで「話すときには、“聞く”ことに関係する脳の部位が活動する」と書いています。話すときには、言葉を聞き取っている（聴覚に関する）脳の部位も同時に活動して、話し方を微妙に調整している、ということのようです。一見すると、話し手は言葉を声として外に出して、それを単に聞き取っているように感じますが、話し手は、自分の声を聞きとることで瞬時にそれに続く言葉を選び、声の速さや高低・調子を調整して、一連の言葉の連なりに意味やニュアンス・感情を付け加えているのではないかと想像されます。

「聞く機能」と「話す機能」の関係は、子どもの言語形成に関連して話されることが多いですが、言語の形成に止まらず、言語形成された後も聞く・話す機能の向上に密接に関連しているはずです。補聴器のフィッティングや人工内耳のマッピングで一定の聞こえの状態が確保されたあとも、より多く話すことでより一層聞こえが向上するのではないか、「話すことが聞こえの機能を向上させ、聞くことが話す機能の向上をもたらす」相互作用があるのではないかと、と自己流の仮説を立てています。

以前、ろう学校を訪問して小学部の勉強を参観させていただいたことがあります。話すことをどのように教えていたのか記憶がありません。協会のさまざまな集まりでも、手話や読話の学習は活発ですが、話すことはほとんどテーマになっていないように思われます。話すことを意識的に行う、そのための訓練方法を研究することは、聞こえの問題に新しい見方を持ち出すのではないかという思いを持っています。